

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 66 号

特集

スポーツの未来のために
第15回日本スポーツ学会大賞

無料

スポーツくじ



スポーツ振興くじ助成事業



「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 | 第66号を発刊するにあたり 長田 渚左

■特集■

「スポーツの未来のために」

4 | 第15回日本スポーツ学会大賞 構成
首藤 正徳
王 貞治氏 一般財団法人 世界少年野球推進財団(WCBF) 理事長

15 | 超人スポーツ 身体×テクノロジーの社会変革
—— 稲見 昌彦 構成
長田 渚左

26 | 第6回 日本スポーツ学会大賞受賞記念インタビュー
大事なのは歴史に学ぶこと 構成
賀川 浩 阿部 雄輔

38 | 『走』第13回
「走る」と「走ることがテーマの小説」は無関係!? 玉木 正之

39 | 夢劇場『馬』No.38「武豊騎手になる」 長田 渚左

40 | バックナンバーのご案内

南 伸坊 表紙のつぶやき

「スポーツの未来っていわれてもちょっとわかんないんでひとつ走りして見に行ってもらおうって
いう絵です。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第20、40～63号はホームページからお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第66号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



2025年、スポーツゴジラは創刊20年目に突入した。

日本のスポーツ文化発展を目的として、2006年1月に第1号を発刊。スポーツの今をさまざまな角度から特集・検証し、その魅力や価値について掘り下げ、伝えてきた。

この間、スポーツは競技や興行という枠を超えて、経済や教育など多様な社会に浸透し、その価値は私たちの想像以上に大きくなっている。

今回の66号では第15回日本スポーツ学会大賞を受賞した王貞治氏の記念スピーチを掲載した。

選手や監督としての実績ではなく、一般財団法人世界少年野球推進財団理事長として30年以上も世界少年野球大会を開催するなど、現役時代を含む半世

紀以上にわたる社会貢献活動が高く評価された。

今年1月25日に早稲田大学大隈記念講堂で行われた授賞式での王氏の言葉が印象的だった。「今まで目の目を見ることがなかったこういった活動が、評価される世の中になってきた。今回の受賞が一番うれしい」。その言葉は私にとっても大きな励みになった。

また、テクノロジーの力を借りて身体にアプローチして新たな「超人スポーツ」を立ち上げた、東京大学先端科学技術研究センターの稲見昌彦教授の講演も併せて掲載した。スポーツの「見る」「支える」という3つの軸にはなかった「つくる」という発想に、スポーツの新たな可能性を感じた。

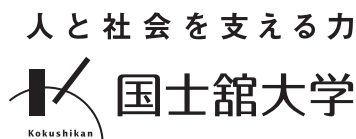
最後に第6回日本スポーツ学会大賞を受賞されたサッカーライターの賀川浩さんが24年12月5日、99歳で亡くなられた。彼の功績を偲んで15年9月の受賞講演も再録した。

心よりご冥福をお祈りいたします。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



文藝春秋



上月財団



MS&AD

三井住友海上



JAPAN SPORT
COUNCIL



JWCPE 日本女子体育大学



(順不同)

第15回日本スポーツ学会大賞

【受賞者】 王 貞治氏

一般財団法人 世界少年
野球推進財団(WCBBF) 理事長

構成 首藤正徳

2024年の第15回日本スポーツ学会大賞は王貞治氏(84)現福岡ソフトバンクホークス会長)に決まった。一般財団法人世界少年野球推進財団理事長として、1990年の第1回大会から30年以上も世界少年野球大会を開催するなど、現役時代を含む長きにわたる社会貢献活動が高く評価された。今年1月25日に早稲田大学大隈記念講堂で行われた授賞式には、同財団の評議員を務めるプロ野球解説者の中畑清氏も祝福に駆けつけた。

王 貞治(おう・さだはる) 1940(昭15)年5月20日、東京都墨田区生まれ。早稲田実業から59年に巨人入団。長嶋茂雄とのON砲と呼ばれた強打で巨人のV9に貢献した。62年から13年連続本塁打王、73、74年に3冠王を獲得。756本塁打の世界記録を樹立した77年に初の国民栄誉賞に。80年の引退まで868本塁打を打ち、本塁打王15度、打点王13度、MVP9度、ベストナイン18度。巨人、ダイエー、ソフトバンクで19年監督を務め、リーグ優勝4度、日本一2度。06年WBCでは日本代表監督として初優勝。現役時代は177cm、79kg。左投げ左打ち。現福岡ソフトバンクホークス会長。

——王貞治さんは通算本塁打868本の世界記録を樹立した“世界のホームラン王”として人々の記憶に刻まれています。第15回日本スポーツ学会大賞の受賞理由は半世紀以上にわたる社会貢献活動です。現役時代から養護学校（特別支援学校）への訪問を続け、引退後は世界少年野球大会を30年以上にわたって開催してきました。今回の受賞をどう受け止められていますか。

王 私はいままでいろんな賞をいただきましたが、今回の受賞が一番うれしいです。今までは自分がやったことに対する賞でした。でも今回は私個人が表彰されたとは思っていません。福島県で熱心に野球を指導されている中畑さんをはじめ、私たちと同じように子どもたちのために頑張っている方々が日本中に大勢います。この賞は私だけではなく、日本各地で使命感を持って活動されている皆さんがいたものだと思えます。そういう活動は今までの目を見ることが少なかった。ですからこう

いう形で評価していただける世の中になってきたというのがうれしいですね。

中畑 私たちは地元や地域で活動していますが、世界の子どもたちに目を向けられて活動されている王さんはスケールが違いますし、王さんにしかできない活動だと思っています。お金もかかるし、大規模な組織もつくらなければなりません。財界の方々が「王さんがやるのなら」と、その人柄と志に皆さん共鳴されています。世界をまたにかけて子どもたちの夢を拡大していく。その王さんの姿を見て、私も何か役に立つことができないかと思って、押しかけ女房じゃないですが、評論員として財団に参加させてもらっています。

原動力は輝く目

——世界少年野球大会は1990年に王さんが友人でもあるメジャーリーグの本塁打王ハンク・アロンさんと一緒に米ロサンゼルスで第1回を開催し

て以来、毎年夏に開催しています。野球を全世界に普及・発展させるとともに、世界の子どもたちの友情と親善の輪を広げようという主旨で、「次の世代の子どもたちに野球の素晴らしさを伝えよう」という王さんとアーロンさんの会話が発端だったと聞いています。その第1回は世界23カ国から約200人の子どもたちが参加して、練習試合や交流会が行われました。残念ながら2021年にアーロンさんは亡くなられ、その後、コロナ禍による中断もありましたが、それを乗り越えて続けてこられました。24年は福岡県で第30回大会が開催され、野球教室や国際交流試合が行われました。これだけ長く続けてこられた原動力は何でしょう。

王 やっぱ子どもたちの笑顔ですね。あのボールをキヤッチしたときのうれしそうな目。子どもって本当に正直なんですよ。参加者には女の子もいるんですが、最初はボールが捕れなくて悲しそうな顔をするんですが、何回かやってボールが捕れたときの

あの表情を、近くで見ると本当にうれしくなりますよ。そんな子どもたちの輝く目をもっともっと身近で見たい。そう思うから続けられているんだと思います。

中畑 野球のない国の子どもたちも参加して初めて体験する。そういう子どもたちが大会の最後に涙を流して「ありがとうございました」と言って、みんなで抱擁するんですよ。あんなのを見たら、それは続けますよ。世界中の子どもたちが笑顔でつながっていくのを見たらうれしくなります。本当にすごいことをやっていると思います。王さんにはこれからも元氣な笑顔で続けてもらいたいと思っていますし、その志を継続していくことが、我々の使命だと思います。

養護学校訪問が力に

——王さんはあまり知られていませんが、現役時代の1960年から巨人の札幌遠征のたびに市内の養

護学校を訪問していました。最初はまだ入団2年目の20歳で、あの一本足打法も習得しておらず、激しいレギュラー争いの最中でしたが、練習や試合の間を縫って訪問していました。その後、キャリアの最盛期でも毎年訪問されています。どういう思いで活動を続けられたのですか。

王 最初は養護学校の先生から、子どもたちに顔を見せてくれませんかと言紙をもらいました。バリバリの中心選手だったらそんな時間はつくれなかったと思いますが、当時はまだ野球場以外で声をかけられるような選手ではなかったですし、暇もありましたので「いいですよ」と言って訪問しました。自分も子どもの頃は多くの人に支えられて大好きな野球をすることができた。そんな私が今度は子どもたちにお返しする年齢になったのだと思いました。学校を訪問して子どもたちの澄んだ瞳、喜ぶ顔を見ただすね。先ほども言いましたが、子どもの目は正直なんですよ。本当にうれしい、もつと会いたい、自

分も野球をやりたい……言葉じゃなくて、目で語りかけてくるんです。それを見てしまうと「また来て下さい」と言われて断れないですし、それが自分自身にとってすごくうれしいことでもあったんですね。だから続けてきたのだと思います。

——王さんが最初に養護学校にあてた手紙にこう書いています。「学園に行くたびに人一倍健康で野球を職業にできることがどんなに恵まれているかと思うのです」。励ますつもりが、子どもたちに逆に励まされることもあったのですか。

王 訪問は自分のためにも、また野球にも絶対にプラスになると思っていました。だんだんホームランが打てるようになって、子どもたちを励ましに行っている自分が、途中から彼らに励まされて打てるようになっただという思いを持つようになりました。地方遠征ではよく（気晴らしに）出かけていたのですが、札幌に遠征したときだけは必ず学校を訪問するようにしていました。学校を卒業してメンバーが

入れ替わっても、彼らの純真な気持ちは変わりませんでした。だから私も頑張ろうという気持ちをずっと持ち続けていましたね。

出会いと運

——王さんの著書『チャレンジが道をひらく』（PHP研究所）の中で「1度きりの人生で僕はたまたま運がよくて、野球と縁ができて、のめり込むことができた」と書かれています。中学生のときに東京・隅田公園のグラウンドで草野球をしていてたまたま通りかかった荒川博さん（当時は毎日オリオンズ選手で、後に巨人軍打撃コーチとして王さんに一本足打法を伝授した）に出会ったのですね。

王 はい。当時は右で打っていたんです。すると荒川さんから「左で投げているのになぜ左で打たないのか。次は左で打ってごらん」と言われて、左で打ったらまたまヒットが出たんです。だから私の人生を振り返ると運が強いんですね。一本足打法で初

めて試合に出場したときも、その日にヒットとホームランが打てた。たぶん打ていなければ続いていたかっと思えます。だから何事も自分の力だと思つたら大間違いなんです。多くの人に支えられて、時の運に恵まれたということだと思っています。

中畑 バットマンからすると力をためて打つという意味では一本足打法は理想なんですが、一番難しい打法でもあるんです。現役時代の王さんのふくらはぎは本当に異常な太さだったんです。あの下半身の強さが一本足打法を支えていたと思いますね。

言葉の力

——近年は草野球をしている子どもたちをすっかり見かけなくなりました。少子化の影響もあり、野球をする子どもたちが減っていますが、今の野球界に必要なことは何でしょうか。

王 これまでは教える側が主体でした。でも今の時代は教わる子どもたちを主体にした指導をしないと、



第30回世界少年野球大会福岡大会で子どもにアドバイスする王貞治氏

野球を続けようと思う人はもつと少なくなると思います。これはサッカーやラグビー、バスケットボールでも同じだと思います。今の子どもは「我慢して続ける」ということがありませんから、嫌だと思ったらパツとやめてしまいます。だから子どもたちにやる気を起こさせる指導法が必要です。そのために一番大切なのが言葉だと思っています。技術を教えるよりも、やる気を引き出す言葉です。結果を残せなかった子どもが「よし、明日もやろう」と思えるような言葉をかけてあげることが、これからの時代は一番大事じゃないでしょうか。

中畑 子どもを指導しているとどうしても厳しくしなければならぬときがあります。上を目指すには辛いのは当たり前なんだよと。そんなときに「あきらめない」という言葉を使うのが大事だと思います。あきらめずに続けて、乗り越えたときの喜びを味わって感動しないと、続かないと思います。だからその段階の子どもたちには、特に気遣いをしてあげる

べきだと思いますね。

——ご自身の子どもの頃はいかがでしたか。

王 早稲田実業に入学して本格的にやるまでは、チームにも所属せずに自由にやっていました。好きな者同士で集まって楽しく野球をしていました。だから厳しいという感覚はなかったですね。高校入学後は授業が終わったら練習、同級生が休日を楽しんでいる土日は練習試合で遠征です。負けたら甲子園に行けなくなりますが、勝たなければという気持ちが強くなって、楽しいというよりしんどかったですね。それでも野球以外のことは考えずに「絶対に甲子園に行くんだ」を合言葉にチームメートと頑張っていました。ですから上を目指すのであれば厳しくするのは当然です。でも楽しむ段階では好きに楽しんでほしいと思います。やっぱり楽しくないと続かないですから。

——王さんはプロ入り後に荒川さんの指導で一本足打法を習得されました。とても厳しい練習だった



第30回世界少年野球大会福岡大会で子どもたちを指導する王貞治氏

ようですが、どうやって乗り越えたのですか。

王 荒川さんは学校（早稲田実業）の先輩でもあったので、絶対に逃げられなかったですね。私もプロでしたから試合出場に選手生命がかかっていましたので必死でした。荒川さんはプロ選手としても約10年の経験がありましたし、私とは少し違いますが足を上げて打っていたので、自分の経験を踏まえて指導してくれました。言葉は厳しかったですね。でも、全部やれという教え方ではなくて「これは追いかける、でもこっちは捨てていい」という感じで、できなくても救われる部分がありました。私がある程度打てるようになると、自分自身の考えも出てきて、荒川さんに言われたことに対して「いや、こうじゃないか」という思いもありましたが、荒川さんが熱心に、一生懸命に教えてくれましたので、荒川さんのものと、自分のものをうまく使い分けてやっていました。それから先ほどの言葉の話とも重なりますが、荒川さんは最初はボロクソなんです、練

習の最後に必ず「よし、これで明日は打てる」と言っていて終わってくれるんです。そうすると明日の試合に対してやる気がわいてくるんです。厳しかったですが、選手のやる気をそがない教え方をされていたんだと思いますね。

——王さんご自身がワールド・ベースボール・クラシック（WBC）の監督をされた時はいかがでしたか。

王 メンバーは日本のえりすぐりの選手ですし、技術的にも日本を代表する選手でしたから、細かいことを求めているダメだと思って、選手たちがやる気を出せるようにグラウンドに送りだすことだけを考えていました。だからサインもほとんど出しませんでした。選手のレベルによつて言葉も違ってくると思うんですよ。ほとんどの選手が初めて米国と真剣勝負で戦うわけですから、特に米国で活躍していたイチローくんの存在、言葉が大きかったですね。「メジャーはいい選手もいるけど多くはたいしたこと

ない」と。

もつと楽しめる環境を

——昨年11月に野球の競技人口や人気拡大といった課題にプロとアマチュアの垣根を越えて野球界全体で取り組むプロジェクト「BEYOND OH! PROJECT (ビヨンド OH プロジェクト)」を始めることと発表されました。未来の野球界のためにどんなことをやっていくのですか。

王 自分自身は野球をやって本当によかったと思っています。でも我々のレベルで野球をやれる人はほんのわずかなんです。甲子園を目指しても多くの人は出場できないし、軟式野球で終わってしまう人もいます。でも一方で60歳を超えて還暦野球を楽しんでいる人たちもいます。何歳になっても「明日試合をする」と思うとワクワクするんですね。それは精神衛生上もすごくいいわけです。だから多くの人に野球に触れてほしい。野球って難しいけど楽しいと

思っていてほしい。そういう場を子どもたちにつくる。それが大事だと思っています。学校の校庭や公園などでキャッチボールをしてはいけない、バットを振ってはいけないと言われますが、それでは前に進まない。どうすればやれるのかを考えていけないといけないと思っています。

——難しいけど楽しい。野球の難しさとはどういうところですか。

王 ボールが小さいからスピードがある。例えばサッカーはボールが大きいからそんなにスピードはないので小さい子も入りやすい。でも野球はスピードがあるからなかなかうまくいかない。昔はお父さんとのキャッチボールでボールをキャッチできるようなった子どもたちが大勢いました。残念ながら今はそんな光景はほとんど見られなくなりました。だから打ったらボールが遠くへ飛んでいったとか、速いボールが投げられるようになったとか、成長過程で子どもたちが野球を楽しんで体感できるような環



第30回世界少年野球大会に参加した池谷環志くん(10＝早稲田実業小学校)と矢部華麗さん(11)が日本スポーツ学会大賞授賞式会場にユニフォーム姿で登場して会場を沸かせた。女神輝トロフィーと白寿生科学研究所から提供の野菜ジュースを贈った。

人生はリレー

——2025年は秋田県で第31回世界少年野球大

境をつくりたいですね。野球はプロになってもなかなかうまくいきません。私自身も現役時代に「これでよし」ということはなかったです。ウナギじゃないですが、つかんだと思ってでもニュルニュルと逃げていく。毎日違うんです。最後の最後まででし



授賞式に訪れたアマチュア野球界の重鎮、山中正竹全日本野球協会会長(上)と寶馨日本高校野球連盟会長(下)が王貞治氏にお祝いの言葉を贈った。

会が予定されています。そして「ビヨンド OH プロジェクト」も本格的にスタートします。今年5月に85歳を迎えられますが、王さんの活動はこれからも続きます。

王 特別のことじゃありません。私は小さい頃から大勢の人にいろんなことを教わり、それなりに生きていくことができるようになりました。ですから今度は自分が若い人のお世話をするというのは当然のことなんです。人生はリレーだと思うんです。今の

子どもたちも、将来は私たちと同じようにバトンをリレーして次の世代に伝えていつてくれるわけですよ。今、人生100年という言葉がありますけど、志を受け継いでいつてもらえれば、人生というのは無限だと思えます。自分が年を取って、体が弱くなっても、志はずっと変わりませんから。今の世の中、こういうものを伝えていかなければならないと思っています。

今回、このような賞をいただいて、こんなうれしいことはありません。この先、どこまで野球とともに歩んでいけるかわかりませんが、野球というのは私にとって命をかける価値のあるものだと思っています。他のことは飽きっぽいんですが、野球だけは飽きないんです。これは私の長所なんだろうと思います。それくらい野球は難しいけど、楽しいんです。ですから私のような思いをもって野球をやってくれる子どもが、一人でも多く出てくれるように、これから今までのように子どもたちとの触れ合いを大

事にして「やっぱり野球っていいなあ」と皆さんに思っていたできるように頑張っていきたいと思っています。

本日は本当にありがとうございました。

WOWOWから
贈られた花束を
中畑清氏から
受け取る王貞治氏



授賞式終了後に
大勢のメディアの取材に答える
王貞治氏と中畑清氏





特集

スポーツの
未来のために

超人スポーツ

身体×テクノロジーの社会変革

——稲見昌彦

構成 長岡裕左
写真 山内嘉裕

（本稿は2024年12月7日、東京新宿区早稲田戸山キャンパスで開催された日本スポーツ学会主催第130回「スポーツを語り合う会」を元に構成しました）

稲見 昌彦（いなみ・まさひこ）1972（昭和47）年、東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。東京大学リサーチアソシエイト、マサチューセッツ工科大学コンピュータ科学・人工知能研究所客員研究員、電気通信大学電気通信学部知能機械工学科教授、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授などを経て、現在は東京大学先端科学技術研究センター副所長。専門は人間拡張工学、自在化技術、エンタテインメント工学。超人スポーツ協会提唱者。

——雑誌『世界思想』（世界思想社刊）で稲見先生

がマントを着ている写真を拝見しました。体が透明になっていて、まるでSFやアニメのようでくぎ付けになりました。東京大学先端科学技術研究センターではどんな研究をしているのですか。

稲見 身体情報学というと、生理学的あるいは運動学的アプローチで身体の可能性を探ることが多いのですが、私は身体を情報システムとして理解して、さまざまな身体性を探り、人間拡張工学に取り組み研究をしています。機械によって拡張された能力を人間が自由自在に扱えること……といったように考えてください。



人や物を透明に見せる「光学迷彩」
（撮影：Ken Straiton）

いつまでも踊っていたい

例えばこちらは第3、第4……の腕を背中に付けて、遠隔で操作するものです。アタッチメントで付け替えは自由。羽根を装着することも可能で、人間を解放するということでもあります。災害時の活動や猫の手も借りたいという多忙な人へのサポート。また新たな芸術を生み出すといったような、いろいろな能力になるわけです。1本の腕が1・5 kgの重さです。4本の腕に加えて背負うものトータルは約10 kgにもなるので、私がこれを付けると15分ではばってしまいます。ところがダンサーの人がこれを付けると腕の重さで重心が変化して思わぬ方向へ重心が寄るので、次の動きが創発される。クリエイティブティーを刺激されて腕を外したくない、いつまでも踊っていたいと感じる人もいます。

腕や足を増やす研究をしている人は世界中にいます。ある学会で鋭くて細かい質問をするシニアの方

に出会いました。

内視鏡手術支援ロ

ボット『ダ・ヴィ

ンチ』を開発され

たKenneth

Salisbury

yという方でした。

『ダ・ヴィンチ』

手術というのは患

者さんの腹部に小さな穴を開け、ロボットアームと

内視鏡を挿入して、医師が内視鏡映像を見ながらロ

ボットを操作します。彼は医師の腕は2本ですが、

腕が増えると止血をしながら複雑な操作もできるの

で、今後に注目していると深い関心を示しました。

正解とメガネ

またあるときに有名な眼鏡店の社長が来て「頭が良くなるメガネを作ってください」と言われました。



「背中に腕をつけた自在肢」(提供:JST ERATO 稲見自在
化身体プロジェクト・東京大学 先端科学技術研究センター
身体情報学分野 稲見・門内研究室・東京大学 生産技術
研究所機械・生体系部門 山中俊治研究室)

そんなメガネなら私がかけたい(笑い)と言って、

学習をサポートするメガネを作りました。さまざま

なセンサーをメガネに付けて、まばたき、頭部や眼

球の運動などを計測すると、被験者の理解度が分か

るというものです。これを学生に話すときちやくち

や嫌な顔をされます。教員は試験で学生の理解度を

計ります。結果的に正解であっても、ヤマ勘で正解

になってしまう可能性もある。このメガネは自信を

持つて解いたのかどうかを見分けることができます。

自信を持つて解いて正解なら問題ないのですが、ヤ

マ勘での正解は理解の仕方を間違っているというこ

とが見えるわけです。一方、自信を持つていたのに

不正解の場合は最悪ですよね(笑い)。

実は今はそれ以上に高度なレベルのVR(表面的

には現実ではないが、本質的には現実)ゴーグルで、

本人でも分かっているメンタルの状態がメガネで

読めるようになっていきます。

——うーん、興味深いですが、なかなか怖い。最先



眼電位計測メガネ(提供:株式会社JINS)

端研究の中でも進歩

が急速・急激だとい

う実感はありますか。

稲見 ここ5年くら

い ChatGTP

(対話型AIサービ

スの文章生成モデ

ル)の進歩は著しい

です。例えば今日の

テーマ「身体×テク

ノロジーの社会革命

——超人スポーツの英語講演概要」と入力すると、

私が今日使用しているスライドなどより、はるかに

よくできたものを用意し、難しい英単語もガンガン

入れてプロットを作ります。私自身も分からないの

で、英語は「中学生レベルにして!」と再入力する

と、なかなか見事なものが出てきます。

テクノロジーとチャレンジ

では今後人のやることはなくなるのか……という

話になってくるのですが、ここにヒントになる事例

があります。1839年にフランスのルイ・ジャッ

ク・マンデ・ダゲールが世界で初めての実用的写真

撮影法「ダゲレオタイプ」を発明しました。その写

真を見るなり、それまで風景画や人物画を描いてい

たフランスの画家たちは「今日を限りに絵画は死ん

だ」と言ったわけです。誰でも精緻なものが機械で

撮れる、絵画の時代は終わったと思ったわけです。

ところが、そのすぐ後に印象派の画家マネ、モネら

が現れる。目ではなく、心で見ているような表現を

する画家が登場した。写実主義の画家には厳しい時

代になったかもしれないけど、人を超える何か新

しいテクノロジーが出てきたら、それを超えるさら

に新しい何かに人類はチャレンジしてきました。

ヒントと応援

ウチの研究室のアドバイザーとして将棋AI（人工知能）『Ponanza』を開発した山本一成さんという方がいるのですが、彼が開発したソフトが初めて現役の男性プロ棋士に勝った時、将棋会館はお葬式のような状況でした。負けた棋士は泣き始め、ネットの掲示板でもたたかれて大変でした。その後、AIがさらに強くなって名人にも勝ってしまった。するとその名人は『Ponanza』をほめて「最近もAIも強くなりましたね。立派なものです」とあつけらかんとしていました。その後、山本さんはぼやいていました。今、『Ponanza』はどんな人間よりも強くなっているはずですが、人々は藤井聡太さんのことしか言わなくなりました。ここにも何かヒントがあるようなのです。

ロボット業界には「不気味な谷現象」という言い方があります。人間は自分たちに似たものには好感

や共感を覚えるのですが、ろう人形には嫌悪を感じる。一方で普通の人形には親しみを覚える。人の感情の中で応援価値のようなものです。例えば自分と同じレベルだと応援しないが、自分より強かったり、速かったりすると応援する。一方で人知を超える強さになると応援しない。人より速いバイクや車は応援しなくても、駆伝は頑張っていると感じて応援する。人は「推しの山」のようなものを持っている気がします。私の大学の元同僚ももの凄い剛速球を投げるピッチングロボット、またどんな球でも正確に打ち返すバッティングロボットを作っていました。でも皆さんは大谷翔平選手への関心は強くても、それらのロボットへの関心は薄いですよ。

他にもクイズ王（クイズ番組の優勝者の称号）よりもChatGPTの方が凄いのですが、人は人を応援したい……そこは応援価値の話ですが、個人としても自分の代わりにAIがいくら優秀になっても、それは便利だけです。今後、ビジネスのため語学

は勉強しなくてもAI翻訳で済むようになる。一方で他国の文化を知りたい、海外の友達をつくりたいのであれば、語学の勉強が必要です。

成長と進化

スポーツ文化は「する」「見る」「支える」が3つの軸とされています。つまり、どんなプレーをして観客を増やしていくか。それらを地域社会が運営面でどのように支えていくか。そこには自分よりも凄い人を応援したい気持ちがあり、また自分が昨日よりも少し進歩していると思いたい、何歳になっても成長していききたいという気持ちが心の中にある。それはいくらAIが発達し、ロボットが進化しても変わらない人間の原理なのではないかと思えます。

そうだとすれば、人の心を支える取り組みとして「自動化」に対して「自在化」を考えます。「自動化」というのは人間がやりたくない面倒なことや、人ではできない環境での仕事、あるいは非常に緻密な作

業等はAIに任せた方がいい。一方でスポーツも含めて自分のやりたいことや、マズローの5段階人間の欲求ピラミッドの一番上になる「自己実現」や他者との交流や娯楽、遊園地に行きたい……それらの欲求は何歳になっても、体が弱ってもあるはずで、それを支援する技術体系は必要なはずです。ですから人間の身体を情報システムとして分析して、それを評価して、人間本来の性質にどこまで結びつけられるかを研究しています。

幸福と選択肢

——確かに人類の歴史を考えれば、AI技術との関係はまだまだ短いし、浅いですね。

稲見 そうですね。隣でロボットに美味しいものをいくら美味しそうに食べてもらってもしょうがないし、遊園地で乗り物に乗ってはいやいでもらっても、こちらは少しも愉快にならないですね（笑い）。人間は自分でやりたいことは、何歳になっても自分で

やりたいものです。

最近よく耳にする言葉に「ウェルビーイング (Well-being)」があります。社会の中で幸福を感じるのに必要とされるものというような意味ですが、単語としてフワツとしていて、あまりはつきりしないですね。それをインドの経済学者で哲学者の Amartya Sen という人がパキッと定義して「ウェルビーイングはある人にとって選択肢の多さなんだ」と言ってます。

例えば、ある定食屋さんに入って、Aランチ一択しかないします。それはそれで美味しいかもしれないけれど「ハンバーグが食べたかったなあ」と思ってしまう。また選挙で候補者が1人しかない場合も選択ができずに困ってしまいます。さらにウェルビーイングより有名ではない言葉に「エージェンシー (Agency)」があります。その行為自体を自分がどうしてもやりたいのか？ という意味です。人に無理にやらされたり、投票しなさいと言われて後

ろで見張られたりするのとは本意ではないですね。その二つ、選択肢の多さのウェルビーイングと、自分でやりたいというエージェンシーの向上が大切だと思われまふ。

「できる」や「できない」

選択肢を増やしていくためにエンジニアとして、さまざまなテクノロジーを出していく。それは良いことばかりではないかもしれませんが、それでも増やしていく。そしてエージェンシーをどう選べるか？ 支援できないか？ というところでもテクノロジーを出してゆくことで「自在化」と結びついてゆけるのではないか、と考えています。

人の研究で重視することに「できる」ということがあります。我々の研究室で開発したもので「けん玉できた！VR」というけん玉のトレーニングシステムがあります。スローモーションの世界で腰の落とし方などの基本的動作を学ぶと、リアルにけん玉

自動化と自在化

• 人間代替(ロボット)

- ー やりたくないこと
- ー 危険作業
- ー 高負荷作業
 - 肉体・精神
- ー 繰り返し作業
- ー 高信頼作業

• 人間拡張(サイボーグ)

- ー やりたいこと
- ー 表現・創造
 - クリエイティブクラス
- ー 娯楽・余暇
- ー コミュニケーション
- ー 承認・奉仕

を扱つてもできるようになります。シニアの女性がトライしましたが、数分で技を体得してできるようになりました。年齢を重ねると多くの「できない」が増えて「できる」が減ることになりますが、テクノロジーの力を使って「できる」が増えると未来に前向きになれると思います。

ヒーローと能力

あるとき学内の広報誌で「お薦めの映画」を推薦するように言われました。他の方は小津安二郎監督などの高尚な作品を挙げましたが、私は『ドラえもん のび太の宇宙開拓史』を推薦しました。どんな話かというと、コヤコヤ星という重力の小さな星にのび太が行くことになります。地球上では運動音痴で力も弱くていじめられっ子ののび太が、重力が弱いために壁も柔らかくて、人の筋力が活かせない星では、普段通りにしていてもスーパーヒーローになつてしまう……そこで考えるのが、能力とは何

なのか？ です。

例えば今、私はペラペラと日本語でスピーチをしています。中国に行けば中国語ができないので語学の不自由な人になります。米国に行つてスピーチすれば、私は今の5割か6割に言語能力が下がってしまいます。能力はその人の持ちものだと思つていられるけれど、違います。環境との相互作用が大きい。

例えばある会社でくすぶつていた人が、部署が変わつたら思わぬ能力を発揮することが多々あります。つまり先ほどのけん玉の事例でもそうですが、ちょっとした環境の変化で思わぬ能力が発揮される。能力は《身体と環境の相互作用》と定義するのであれば、能力を発揮できる環境をうまく設計しようという考えや、身体拡張技術でアシストしようという複数のアプローチをすることが可能だと考えます。

お手玉やジャグリングが上手くできない人がいたとします。でも単に「できない」でも、それがどこ

のルートのどのレベルなのかをAIが分析すると、言語化できないようなところを上手く指摘します。人によつて「背筋を伸ばして、左右対称性を意識してください」というようなアドバイ스가有効になります。また別の人の「できない」には「投げた物に意識を集中し過ぎないように」が良いアドバイスになります。

国宝と計測

——能力と環境はことのほか重要ですね？

稲見 高度な伝承の世界などでは「技は目で盗め」と言われてきました。視覚では移動した軌跡しか分かりません。力の入れ方、力の抜き方はまったく分かりません。そこで触覚的部分にセンサーを付けて計測するシステムを当研究室の檜山敦特任教授が開発しました。

それまで修業の期間が長くてなかなか後継者が育たなかった和紙の紙すぎがありました。そこで人間

国宝の方にセンサーを付けて筋活動を触覚に変換し、その手がかりを使って普通の大学生が被験者として練習すると、8割の人が基本動作を10回の練習でできるようになりました。先ほどけん玉のスローモーション映像がありました、身体運動はなかなか言語化しにくいものです。その本質的に言語化しにくい身体を理解して上手に伝えてゆくことは人間拡張技術を通じてできるようになりつつあると思います。

予測と言語化

身体動作の研究でAIにサッカーのPK戦などで選手がどこにボールを蹴るかを学ばせ、予測させる研究をしました。ある選手に関してかなり精度が上がったので「どこに注目したのか？」とAIに聞いたところ「選手の左手が怪しい」という答えが返ってきました。キーパーにこれを伝えると予測できて防御率が上がる……というくらいにはなってきました。今までだったら何か雰囲気が違うような……

ぐらいいし言えなかった身体に関するスキルの言語化ができていくものを、AIならばあらゆるデータを駆使して説明してくれることになります。

こうやってさまざまなテクノロジーをトレーニングや超人的な機能などにも応用できることが分かってきました。ということで、それらを使って新しいスポーツをつくってみようと考えました。「する」「見る」「支える」だけでなく「つくる」です。eスポーツも流行っていますが、あれは身体を使わないので、頭も身体も使うものを考えたいと思いました。振り返ると私たちが小学生の頃は、自分たちで勝手にルールをつくり、または勝手にアレンジして楽しんで遊んでいたわけです。中学、高校になるとスポーツが部活になってしまった。別に部活が悪いと言っているのではなくて、ルールが固定化されているからルールの創造性の部分はあまりトレーニングすることはなかった。日本人は創造性がないわけではなくて、例えばゼロからルールを作る必要のある日

本発のゲームが大きな富をもたらすようになっていく。それらのノウハウも生かして、新しいテクノロジの使い方、うまいルールの加え方も交えて、超人スポーツ協회를立ち上げました。

エンジニアだけではなく、アーティストやゲームクリエイターの方などが集まって33種目を考えました。東京タワーフットタウン内にeスポーツパークがありまして、その中で新しいスポーツ9種目ができるとなっています。新しいコミュニティという意味でも楽しんでもらっているようです。

拡張と心

——背中から腕を付けて動くことで、重心の変化から思わぬ身体動作が生まれ、10 kgもある腕を外したくないと感じるのは印象的でした。身体が変わると心も変化するのでしょうか。

稲見 分かってきたことに身体が少し拡張することで心が変わるようだという事です。排気量の大き

きな車を運転すると、言動が少し荒くなる人がいますが、身体と心の関係性を表しているのかもしれない。人間にシッポを付ける研究もしました。シッポがあると急に誰かに押されても倒れなくなり、歩くときもリズムがとれて歩きやすいなどの感覚がありました。手に6本目の指を装着して、その影響を身体の中でどう受けるかの研究もしています。シッポや指を外した後も心に影響があるようです。身体はどれだけ技術が進んでも唯一の物理的存在です。その掛け替えのない自分の肉体と楽しみながら付き合っていくというところにスポーツがあると思っています。スポーツは今、オリンピックとパラリンピックを分けなくてはいけなかったり性別や身体能力の差で障害の有無を分けることなど、さまざまな議論になっていますが、さらにインクルーシブな社会を実現するために、いろいろな技術でのフォローが可能になると良いと思います、研究を続けていきます。

賀川 浩

さん

「大事なのは
歴史に学ぶこと」

構成 阿部雄輔



賀川 浩 (かがわ・ひろし) 1924(大正13)年12月29日、兵庫県神戸市生まれ。41年、神戸一中の選手として第10回明治神宮大会優勝。特攻隊員として出征した太平洋戦争から復員後しばし浪々の生活を経て52年、産経新聞社に運動部記者として入社。64年、東京五輪5位／6位決定戦「大阪トーナメント」を企画。74年西ドイツ大会でW杯初取材。「サッカーマガジン」に「W杯の旅」連載開始。2010年、日本サッカー殿堂入り。14年、神戸市立図書館に「神戸賀川サッカー文庫」を開設。15年、FIFA会長賞を受賞。

2015年の日本スポーツ学会大賞受賞者は、90歳の現役サッカージャーナリスト・賀川浩さん。1924（大正13）年、大日本蹴球協会（現・JFA）ができてわずか3年後に神戸で生まれ、小学生の時からサッカーに魅せられる。特攻隊として外地に赴きながら出撃することなく終戦を迎えた青年は、一度は離れようとしたサッカーの世界に戻ってきた。52（昭和27）年からは記者、ジャーナリストとして日本サッカーの興隆をメディア側からバックアップし続けてきた。国内外のサッカーの発展に尽くした功績が認められ、2010（平成22）年に日本サッカー殿堂入りを果たし、15年にはFIFA会長賞を受賞。90歳とは思えぬ豊饒かしくやくとした語り口、記憶力で自らの足跡や未来の日本サッカーへの提言を語ってくれた。

もともと私の家は医者の家系。江戸時代中期に賀川玄悦がわけんえつという人物がいて、この人は日本の産婦人科か

医の始祖ということになっています。指先の非常に敏感な人でね、触診で触って母体の中で胎児が頭を下にして入っているということを『賀川産論』という論文で発表している。これは今で言えばノーベル賞級の発見でしょう。

私の祖父も羽振りの良い医者でしたが、親父がまだほんの2歳か3歳の時に心臓麻痺で若死にしてみう。神戸の姉の嫁ぎ先に引き取られた親父は、医者にはならず貿易商になり、イギリスあたりとボタンの輸出輸入をしていた。

親父は英語がうまくて、商売柄外国人ともよくつきあっていたし、神戸という町自体の文化が西洋風というかハイカラな雰囲気があった。スポーツについてもKRAC（神戸レガッタ&アスレチッククラブ1870年創立）というクラブがあつて、そこでサッカーやラグビーや陸上競技や野球やテニスを楽しむ。六甲山の山の上には外国人の別荘があつて、別荘の横の溜池で冬氷が張るとスケートもしていた。

そういう影響でわが家もフィギュアスケートをはじめいろんなスポーツに親しみました。親父は野球も好きで、甲子園の今と言う高校野球、当時の中等学校野球大会にも連れて行ってもらいました。昭和8（1933）年の中京商・明石中の準決勝は延長25回戦の史上最長試合として有名ですが（中京商が1―0でサヨナラ勝ち）、翌日の中京と平安中学の決勝戦（中京商が2―1で勝利）は親父と一緒に見に行きましたよ。

兄・賀川太郎の影響でサッカーを始める

サッカーをやるようになったのは、賀川太郎（1922〜1990年。賀川さんの2歳年長の兄上。戦後を代表する選手の一人として2006年に日本サッカー殿堂入り）の影響です。兄は小学生の時は野球の選手だったんです。ピッチャーで四番打者で、同じ年齢にはのちにプロ野球選手になった別所（昭↓毅彦。南海、巨人で通算310勝）がいたんです

が、小学生の大会では兄貴の方が三振奪取王でした。別所さんは当時の学校の制度で高等小学校に行ってから2年たつて滝川中学へ行きましたから、中学では僕と一緒にの学年になって、明治神宮大会には別所さんが野球、僕がサッカーの兵庫県の選手団と一緒に上京したこともあります。

そういうわけで小学校の時は兄は野球で有名でしたが、うちの隣の家の二階に東京高等師範を出た河本春男という神戸一中のサッカー部長が下宿していたこともあって兄貴はサッカー部に引きずり込まれて。僕もサッカーをやるようになったんです。僕が通っていた雲中小学校^{うんちゅう}という小学校は、当時すでにサッカーが盛んでしたね。昭和10（1935）年頃の話ですが、サッカーはまだ全国的には普及していなかったんですけど、雲中小学校では夏は野球、冬はフットボールというのが当たり前でした。

当時の日本のサッカーはどうなっていたかと言いますと、1930（昭和5）年に第9回極東大会と

というのがあって、この時に大日本蹴球協会、今のサッカー協会が初めて選抜チームをつくりまします。当時一番強かったのは東京帝国大学です。これよりだいぶ前、大正12（1923）年に野津謙^{のづみずる}という知恵者が、インターハイという旧制高等学校の大会を始めます。東大、京大に入る学生は旧制中学から旧制高校を出て東大へ行くわけですから、東大のサッカーを強くするためには高等学校にサッカーを普及しようということ、当時東大の学生で、のちにサッカー協会会長になった野津さんが始めた。おかげで良い選手が育つてちょうど昭和5年頃には東大が全盛で、東大を主力とする選抜チームをつくりまします。そしてこの第9回極東大会でそれまでなかなか勝てなかった中華民国と激烈な戦いをして3―3で引き分けて、初めて優勝します。それで大日本体育協会の中でもオリンピックに参加しようという機運が出てきたのが1930年、昭和5年のことです。私は幼稚園から小学校に上る前でしたので当然あとで先輩

から聞いた話ですが。

ところが1932年のロサンゼルスオリンピックではサッカーという競技自体が実施されず、ようやく4年後、1936（昭和11）年のベルリン大会で、初めて日本代表がオリンピックに出場します。そして1回戦で優勝候補と言われていたスウェーデン代表チームと試合をして、3―2で勝つという大仕事をした。

ベルリンの屈辱を忘れないスウェーデン

私は1992年にヨーロッパ選手権がスウェーデンであった時に、今の人が36年のことをどれだけ知ってるか、興味を持って調べてみたんです。ほとんどと言っていいほど若い人が知っていた。日本に負けて代表チームは大変だったと。帰ったら何を言われるか分かんので、チームはストックホルムのひとつ手前の駅で解散したとかですね。ラジオで試合を実況したアナウンサーは、日本人ががんがん走り

回って攻めてくる、日本人がそこにもここにもおるというので、「ヤパーナ、ヤパーナ、ヤパーナ」と叫んだ。そのアナウンサーはしばらく「ヤパーナ」という仇名で呼ばれたとかですね。そういう話を若い人が話すのです。おじいさんから聞いたとか父親から聞いたと。それぐらいオリンピックで日本に負けたのはスウェーデン側にとってはショックだったらしい。

日本ではサッカー協会は大喜びしたが、世間一般はあんまり関心はなかったと思います。ただ私たちは後輩はベルリン・オリンピックの話をもう耳がタコになるほど聞かされましたね。36年のチームの中心は早稲田大学の選手です。当時は早稲田が強くて慶應がそれを追っかけて強くなってきていました。戦前の東京で一番人気があったスポーツはもちろん野球の早慶戦ですが、それ以外のスポーツでも早慶戦が盛り上がると人気が出る。サッカーの早慶戦も盛り上がって、明治神宮外苑の競技場、のちの国立競

技場が満員になってキックオフが遅れたというほど人気が高まりました。

ベルリン・オリンピックから5、6年が日本サッカーの戦前の最盛期、私どもの言う第一期黄金時代です。その頃私は中学生で、ベルリンに行った先輩から直接話を聞きましたし、スウェーデン戦で1点目のゴールを入れた川本泰三氏には公私ともにお世話になって、一緒に釣りに連れてってもらいました。戦後、いろんな先輩たちとサッカーをやったおかげで、戦前の黄金期の選手の中には相当うまかった人もいたということはいまだに肝に銘じています。こうして折角盛り上がったサッカー熱も、太平洋戦争で消えてしまいます。

特攻隊に志願。朝鮮半島で終戦を迎える

私は神戸一中から神戸大学の予科に進んでずっとサッカーをやっていたが、陸軍特別操縦見習士官という、学生から飛行機乗りになる制度があつて、私

のようなチビは重い背囊を背負って鉄砲かついで歩く歩兵よりは飛行機に乗った方がお国の役に立つだろうというんで志願したんです。

第413飛行隊という部隊に入って、これはいわゆる特攻隊、特別攻撃隊でした。特攻隊と言うと、死ぬために訓練したんですかと言うんですが、これは違うんです。陸軍では特攻隊のことを「と号部隊」と言います。軍隊には作戦要綱というものがあって、その第一条には必ずその目的が書かれています。それによれば「と号部隊」の目的は、「航行マタハ泊地ニ於ケル敵艦船艇ニ邁進衝突シコレヲ必沈シテ敵ノ企図ヲ殲滅シ以テ全軍制勝ノ根基ヲ確立スルニアリ」ということです。死ぬのが目的ではなくて、邁進衝突して相手の船を沈めることが目的なんです。衝突したらまあ死ぬやろということではあります。が、だげど死ぬことが目的じゃない。ぶつからんことには爆弾が爆発しませんから、撃ち落とされる前に何とか相手の船にぶつかる。そのための訓練を

やったわけです。

結局出撃することのないまま朝鮮半島の38度線の少し北、今の北朝鮮の海州というところの飛行場で終戦を迎えます。しばらくして南朝鮮に移動したあとで、雨の日に小学校のグラウンドを見ていたら、近所の子供がボール持ってきて壁に当ててボール蹴りだしたんです。こっちもその気になって編上靴を履いてグラウンドまで下りていって、二人でボールを壁に向かって蹴って、返ってくるとまた蹴るっていうのをしばらくやりました。戦争終わって最初にボール蹴った時の話です。あのあと朝鮮戦争があつたわけで、あの子は生き延びたのか……。

大学はやめたがサッカーだけは続けた

復員したのは昭和20（1945）年の10月でした。神戸は焼け野原になっていて私の家も焼けてしまい、京都の親戚の家に泊まっていたら、大学の友人から葉書が来た。生きとつたらしいな、10月の何日に西

宮でボール蹴るからバッグ持って来いと、それだけで。それが関西のサッカー復興の最初でした。

軍隊にいる間はひたすら「驀進衝突」して敵の艦船を沈めると覚悟し、若くして人生はそういうもんだと決めてましたから、戦争終わったからも帰れと言われたって、どないするんだと。「驀進衝突」して終わりになることになってたのに、あとどうするんだという感じでしたね。第413飛行隊の隊長は川上晃良（かわかみあきよし）といって、当時日本で十本の指に入るロッククライミングの名手でしたが、戦後すぐ彼から「帰ってみたけど世の中変ってしまつて面白くない。ただ純粋に必死することだけを考えて演習をしていたあの時期が懐かしい」という葉書をもらつて、それは今でも大事にとつてあります。

しばらくして大学もやめて、正直もうサッカーいっぺん打ち切ろうと思つて神戸大学やめたんですけど、結局あちこちから試合に出てくれとか教えてくれと言われて、大学はやめたけどサッカーだけは続

いていました。「梁山泊」なんて気取っていましたが、実際は何もせずにごろごろしていただけです。

7年の浪々の日々を経てサッカー記者に

その頃一緒にいたのが、今は世界的な彫刻家になった流政之（ながれまさゆき）です。もともとは兄貴の軍隊の友達で、流に会つて僕は世の中には天才というものがいることを知りました。うちの親父の写真見てチャチャチャツと水彩で走り描きみたいに描くとね、それがもう親父の雰囲気をもつつかんでますから。もののつかみ方のすごさ、それを絵にしてあらわす能力に、才能とはこんなもんかと思いましたね。神戸一中みたいな学校にいましたから、一生懸命やれば何でもできるようにになると。一生懸命勉強して学年で三十三番ぐらいに入れば、一高・東大へみな行く。そういう学校ですから。だからサッカーも一生懸命やればうまくなるもんだと叩き込まれたのを、サッカーにも天賦の才能というもんがあると、そういう視点

を持てるようになりました。

1952（昭和27）年にスウェーデンからヘルシンボリというチームが来日します。スウェーデンのサッカーにとつてはベルリン・オリンピックで日本に負けたのは今も消えない汚点ですから、当時デグナーという団長が来日して最初の言葉が「1936年のリベンジに来た」という意気込みで。全勝して帰っていききました。そのスウェーデンチームのことを僕がたまたま京都の新聞に書いたんです。

当時流はまだ石の彫刻にいく前ですが、とにかく魅力的な男で話が面白くて、京都の文化人や新聞記者が自然に彼のまわりに集まってくる。文化部だけでなく運動部の記者も来るようになっていました。ちょうどその頃産経新聞が運動・スポーツ面を拡張するためにボールゲームが書ける記者をさがしていた、京都の新聞の記事を読んだ記者が産経の運動部長の木村象雷^{きむらしょうらい}さんを紹介してくれたんです。木村さんはその前の年に特派員としてニューデリーで行わ

れた第1回アジア大会に行っていて、アジア大会の日本代表15人のうち10人が神戸一中出身でしたから、うちの兄貴とも向こうで顔を合わして知ってるわけです。あの賀川太郎の弟かということでも会ってくれて、そういう縁でサッカー記者になるわけです。1952年のことです。終戦から7年もごろごろしていたことになりますね。

FIFAに直訴し関西にオリンピックを招く

当時日本のサッカーはアジアでもなかなか成績が上らず、人気の面でもベルリンのあとの戦前の黄金期のような注目は集めていませんでした。そうしているうちに1964年に東京オリンピックを迎えることが決まって、開催国の特権で予選が免除されていきなり本番に出られることになりました。しかし全国民が注目するその本番で1勝もできなかったら日本のサッカーは終わってしまうんじゃないか、当時の協会はそれくらい危機感を持ちました。それで打

った手が、デットマール・クラマーの招聘でした。当時日本には一人もいなかったプロフェッショナルのコーチをドイツから招いた。体育の先生はたくさんいましたが、フットボールを教えることを職業としている人は誰もいなかったんです。

日本と同じ敗戦国のドイツの戦後のサッカーの復興は、まず100人のコーチをつくることから始まりました。100人のコーチがそれぞれ100人のコーチを育てれば、ドイツのサッカーは復興するという考えで、戦後のドイツはコーチの育成にものすごく力を入れたんです。その中心にいた一人がデットマール・クラマーで、彼は20代で西部地区の主任コーチになったぐらいですから、コーチの天才だったと思います。教えることに對する情熱とひとつひとつの言葉のうまさ、選び方、そういうことに關しては今思い出しても天才的でしたね。

オリンピックで個人的に思い出深いのは、FIFAに応援してもらって関西でサッカーの試合をでき

たことですね。国の税金使って東京だけ繁栄するのはいかなものかというのが関西人である私の意見でした。これまで他国ではオリンピックの1次リーグの試合を地方で分散してやるのはいくらでも前例のあることだから、関西にもオリンピックの試合をひとつふたつ持つてきてくれと東京の組織委員会に頼んだんですが、剣もほろろでした。そこで一計を案じてFIFAに直訴したんです。当時のスタンレー・ラウスという会長が考えた案がすごいんですよ。準々決勝に負けた4チームを関西に呼んで5、6位決定戦をやったらどうだと。これは東京の日程にまったく関係がないだろう。FIFAもこれなら応援する。とこう言ってくれたんです。4チームの中には準々決勝でチェコスロバキアに負けた日本もいて、ユーゴスラビアとの試合では長居競技場が満員になり（ユーゴに1-6で敗れる。のちの日本代表監督オシムが2得点）、関西協会には当時のお金で600万円ほどが残りしました。それはサッカーを盛んに

するためならいくらでも応援するというFIFAの姿勢のあらわれで、今でも私は感謝しております。FIFAは今いろんなことで大変に採めておりますが、世界中でサッカーを盛んにするという基本姿勢はぶれていないように思います。そういう精神を持ち続けて、何とか盛り返していって欲しいですね。

クラマーの提言が日本サッカー興隆の礎に

東京オリンピックで日本は1次リーグでアルゼンチンに勝つことができました。たった1勝だったが、デットマール・クラマーは日本代表を強化して、1勝するチームをつくってくれた。そしてオリンピックが終わった1964年11月、日本サッカーはこれからこれだけのことをしていかなくちやいかんということをきつちりと言い残して帰国しました。その彼の指針を長沼（健）、岡野（俊一郎）、川淵（三郎）たちがずっと引き継いでやってくれて、日本サッカーが今日ここまで来ているのかと思います。

天皇杯を誰でもが参加できる大会にしたのも長沼たちの仕事で、これは1972（昭和47）年に実現しました。天皇杯は最初は全日本選手権という名称で、大日本蹴球協会が設立した大正10（1921）年に始まり、優勝チームにはイングランドのフットボールアソシエーション（FA）から寄贈されたシルバーカップが贈られました。本場のFAカップ（1871年創設）に倣った勝ち上がり戦ノックアウトシステムの大会で、これを日本協会に登録している大人のチームであれば誰でもが参加できるオープンな大会にしたわけです。大学生がプロに勝つたり、J2がJ1に勝つたりという面白みが毎年話題になりますが、その本質は、日本協会に登録したチームであれば、1年目からでも町や区の予選から出場する権利があり、勝ち上がっていけば優勝する権利もある。そういう世界でも珍しいデモクラティックな大会であるということです。

もうひとつは1976（昭和51）年、選手の登録

を年齢別の個人登録に改めたことです。それまではたとえば中学を卒業して、高校に行けば高体連の大会に出られますが、高校に行かないで働いている子は、実業団チームにでも入らなければ、出られる大会がないわけです。それはおかしいということで、高校だ大学だ社会人だといういわば社会的身分で区切るのではなくて、成長期の子供たちに対してはアンダー14、アンダー16、アンダー18で区切ろうと。今のサッカー記者には実感が薄いかもしれませんが、プロ化をして世界に追いついていく上でこれは非常に重大なエポックな話です。そういう意味でもクラマーが来てくれたことは日本のサッカーがここまで興隆する上での最も大きな礎となりました。

FIFA会長賞受賞。クラマーと最後の対面

今年の1月、チューリッヒでFIFA会長賞の表彰をもらった帰りに、久しぶりにクラマーに会ってきました。僕の顔を見るなりアルバムの一冊を

取って、「これを持って帰れ。俺はもう長くないから」とこう言うんですね。「それはあかん。あんたは4月4日が誕生日やろう」と。彼は僕より半年遅い1925年の4月4日生まれですから。「4月で満90歳になるのやろ。だったら90歳同土で日本でもトークショーやろう」と言ったら、「それを目標としてももう少し頑張ってみるか」と言っていました。

この間は韓国へ行つて僕が神戸一中の5年生で出た1941（昭和16）年の明治神宮大会の話をしてきました。当時朝鮮半島は日本の領土で、明治神宮大会には朝鮮からも台湾からも代表が来ました。決勝の相手が朝鮮の普成中学で、2-2の引き分けで両校優勝だったと言ったら、協会の役員さんからパツとその時の選手の名前が出てきました。張慶煥チヨウケイカンと言つて、1967（昭和42）年のメキシコ・オリンピック予選で日本と3-3で引き分けたあの大激戦の時の韓国代表のヘッドコーチです。「賀川さん、41年の普成中学には張慶煥がいましたよ」と、こう

ですよ。韓国は歴史を大事にしますね。

当時朝鮮の選手たちは体が大きくて力も強かった。内地では青山師範や御影師範などが強敵でしたが、師範学校には僕らの2歳上の生徒もいたわけです。そういう相手に勝つために神戸一中はショートパス戦術を完成させました。体が小さいというハンディキャップがありますから、ボールを細かくつないで敏捷性を生かして勝つというやり方を鍛えたんです。今の日本のサッカーと同じですね。このことは戦前から同じなんです。

やっぱり歴史を見ることが自分たちの足場がしっかりする、ものを見る目がしっかりすると思うんですね。言い換えれば、自分らのやっていることが何が理解できるようになる。それによつて日本のサッカーはもう一段上へ上ると思うんです。それと今、学校で日本の近代史をほとんど習わないでしょう。入学試験に出ないから。だとしたら自分の好きなスポーツの歴史を調べれば、これはたかだか150年

ぐらいの話ですから、明治から大正、昭和、平成に至る社会史を勉強することになりますよね。日本人は司馬(遼太郎)さんのおかげで歴史の面白さを知りました。サッカーやスポーツの歴史も面白いんです。まあこちらは腕がないから司馬さんほどうまくは書けないですけどね。

(本稿は2015年9月7日、筑波大学東京キャンパス文京校舎で行われた日本スポーツ学会大賞受賞記念講演にインタビューを加え構成した。インタビュー直後の9月17日、『日本サッカーの父』デットマール・クラマー氏がドイツ・バイエルン州の自宅で逝去。9月19日、20日に行われたJリーグ全試合で黙祷が捧げられ、日本サッカー界は『父』の死を悼んだ)

『走』第13回



「走る」と「走ることがテーマの小説」は無関係!?

玉木正之

「走る」ことをテーマにした小説で最も有名な作品は、イギリスの作家アラン・シリトーが1959年に発表した『長距離ランナーの孤独』だろう。作品を読んでない人でも、タイトルだけで長距離走者は孤独に走り続けるのだ……と想像でき、読書欲をそそられる。

が、ストーリーは少々違う。

主人公は労働者階級の母子家庭に育った少年で、万引きを繰り返して逮捕され、少年院に入れられる。そこで「走る」ことに目覚め、長距離走者として力を付け、町のクロスカン トロリー大会に出場。打つ千切り^{ぶちぎ}の1位を走り続けるが、

その間に自分が優勝すれば、自分を虐めた警官や太鼓腹をした陰険な院長が、自分たちの教育の成果として自慢するに違いない……という思いが湧き、ゴール直前でスピードを落とし、2位を走ってきた少年にわざと優勝を譲る……というストーリーだ。

映画化もされ、十数カ国語に翻訳された傑作だが、「走る」ことへの目覚めが、青年の「反抗心」の惹起に繋がっているためか、スポーツの世界で推薦されたとは聞いたことがない。

村上春樹氏は日常的にフルマラソンを走る作家で、小説を書くことは「不健康極まりない作業」で「その毒素に対抗できる自前の免疫システムを作りあげなくてはならない」ために走ると言う(『走ることについて語ることについて僕の語ること』文春文庫より)。

「走ることをテーマにした小説」と、実際に「走ること」は無関係で、名作『長距離ランナーの孤独』を読んでも金メダルは取れないでしょうが、「走る意味」は深まるでしょうね。



夢劇場『馬』

No.38



武豊騎手になる

長田渚左

日本スポーツ学会の第130回スポーツを語り合う会で講演した人間拡張工学に取り組む稲見昌彦氏が、自らの背中に4本の腕を装着した画像を見せて、いろいろな活用法を紹介した。

今後、技術開発が進んで第3〜6の腕を身体と一体化させて駆使できるようになれば、災害救助や緊急手術などで一人6役くらいの働きをするかもしれないという。

例えば第3の腕が止血をし、第4がメスを握り、第5は鉗子（かんし）を操り、第6が額の汗をふき……まるで一人で何役もこなす天才医師ブラックジャックを思わせる（笑い）。

ある競馬で4コーナーを回ってレースが決したかに見えたとき、馬群の中をこじ開けるようにして先頭に立ち、勝利した馬がいた。

どこをどう抜けてきたのか分からず、スローに

して映像を見直した。わずか15cmくらいの馬と馬の隙間を縫うように走る神業だった。

勝利騎手にインタビュすると「なぜこんなレースができたか分からない。自分の下半身が馬になったみたいだった。馬から下りたくなかった……」と言った。

まるで人馬一体。彼のコメントは上半身が人間で下半身が馬という幻想の怪物ケンタウロスを連想させた。

今回、稲見氏のご講演を聴きながら、究極のサラブレッドと言われたディープリンパクトのAIロボット化を思い付いた。

ディープリンパクトの能力のすべてをロボットに入力し、誰もが騎乗して過去のレースを3Dで追体験できたら面白い。あの武豊騎手と同じように、最速80kmと言われるレースのスペクタクルを馬上で味わえたら、まったく新しい競馬の魅力を実感できるはずだ。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。申し込み住所が変更になりました。

〒168-0063
杉並区和泉1-40-13-401
スポーツネットワークジャパン
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため、やむをえず変更いたしました。

6冊まで 送料 500円
12冊まで 送料 1000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の夏号第67号は2025年6月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みになります。ご利用ください。

- 世田谷区八幡山・大宅社一文庫
- 世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
- 港区広尾・東京都立中央図書館
- 千代田区永田町・国立国会図書館
- 港区芝・東京都人権プラザ図書館
- 新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

阿部雄輔／五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（国士舘大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／森林貴彦（慶應義塾幼稚舎教諭）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192
埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。
都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2025年3月10日発行
第1巻第66号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳
波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 株式会社 プライム・オリジンズ

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401